

道徳教育の実践はどう変わるか

教育創造研究センター所長

たかしな
高階
れいじ
玲治

1 考え、議論する道徳へ転換

周知のように「道徳の時間」は、「特別な教科 道徳」に変わり、次期学習指導要領に先駆けて小学校は平成30年度、中学校は31年度から実施されることになった。特に授業における指導方法は中教審の「考える道徳への転換に向けたワーキンググループ(WG)」で論議され、7月に報告書が示された。今後は検定教科書が作成されるが、当然ながら今からでも一部実施可能である。

そこで最も重視したいのは、これまでの道徳の時間をどう転換するか、である。

その主要なイメージは、「考え、議論する道徳」への転換である。だが、なぜ考え、議論することが重要なのか。

その最も大きな要因は単なる生活経験の話し合いや、読み物教材の登場人物の心情理解に終始する「読みとり」指導からの転換である。また、一部にみられる道徳軽視や指導の形式化からの脱却も重要である。

周知のように次期学習指導要領は、育成すべき資質・能力やアクティブ・ラーニングが主要な課題になっているが、道徳の時間においても、子ども自らが考え、主体的に学び、仲間と対話しながら深い学びを得ることが重要視されている。

中教審の「論点整理」には次のような重要な道徳教育の観点が示されていた。「『考え、議論する』道徳科への質的転換については、子供たちに道徳的な実践への安易な決意表明を迫るような指導を避ける余り道徳の時間を内面的資質の育成に完結させ、

その結果、実際の教室における指導が読み物教材の登場人物の心情理解のみに偏り、『あなたならどのように考え、行動・実践するか』を子供たちに真正面から問うことを避けてきた嫌いがあることを背景としてある。」そこで、「問題解決の学習や体験的な学習などを通じて、自分ならどのように行動・実践するかを考えさせ、自分とは異なる意見と向かい合い議論する中で、道徳的価値について多面的・多角的に学び、実践へと結び付け、さらに習慣化していく指導へと転換することこそ道徳の特別教科化の大きな目的である。」としている。

2 多角的・多面的に考えるとは

新しい道徳科の目標は、現行と異なって次の文言が示されている。

「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方を深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」

この文言にある「多面的・多角的に考え」が先に述べた「考え、議論する道徳」につながるのである。

課題に向き合ったとき、主体的に判断し、考え、追究しようとする意欲や態度を持つとともに、仲間と対話する中で何が本質であるかを多面的・多角的に認識することで、深い理解に達しようとする。その態度形成は予測困難な未来に向けて道徳的な実践力を形成するための自己の生き方を創り上げる基盤となるものである。

その背景には次期学習指導要領のどの教科等においても基本としている考え方があ
る。それは「育成すべき資質・能力」に全
ての学習活動が収斂(れん)する考え方
である。つまり、学力の3要素と言われる「何
を知っているか、何ができるか(個別の知
識・技能)」、「知っていること・できるこ
とをどう使うか(思考力・判断力・表現力
等)」、「どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか(学びに向かう力、
人間性等)」である。

この考え方が道徳科においても重要な要
素とされて「質の高い」授業活動が求めら
れるようになる。

3 道徳授業はどう変わるか

道徳の諸価値について多面的・多角的に
学ぶために、当然ながら授業展開が変わる。
その視点はなにか。

WGは3つの視点をあげている。

①読み物教材の登場人物への自我関与が中
心の学習。読み物教材が無くなるのでは
ない。教材の登場人物と自分との関わりあ
いを多面的・多角的に考えることで、登場
人物に自分を投影して自己認識などを深め
る。

②問題解決的な学習。生きる上で出会う多
様な道徳問題について、自ら考え、対話し
ながら深め合う中で、道徳的価値の意味把
握を深め、道徳的な行為についての資質・
能力を養う。複数時間による単元的なまと
まりが必要になる。

③道徳的行為における体験的な学習。WG
は役割演技などの体験的な学習によって実
際の問題場面で実感を持って理解すること
で、様々な問題等を主体的に解決するた
めに必要な資質・能力を養いたいとして
いる。

更にWGは、このような質の高い多様な
指導への期待として、道徳的な問題や場面

を設定するための視点を次のようにあげて
いる。

①道徳的諸価値が実現されていないことに
起因する問題、②道徳的諸価値について理
解が不十分又は誤解していることから生じ
る問題、③道徳的諸価値のことは理解して
いるが、それを実現しようとする自分とそ
うでない自分との葛藤から生じる問題、④
複数の道徳的側面の間での対立から生じる
問題、などである。

これらの問題構造を踏まえた場面設定が
なされることが求められる、としているの
である。

こうしたことから、道徳の指導方法は従
来に比べてかなり多様化し質が高くなるこ
とが期待されるようになる。検定教科書も
新しい道徳科の考えを受けて副読本とは大
きく変わる可能性がある。

また、子どもに身近な教材選択の必要度
も増すであろうから、学校や地域の創意工
夫による補助教材の作成・活用への期待も
生まれる。実生活や実社会の課題が取り上
げられ、多面的・多角的な考え方が実際の
場面で活用されることも必要である。

ところで道徳科が誕生した背景に国の教
育再生実行会議の第一次提言「いじめの問
題等への対応について」がある。道徳科で
指導を強化したいのは「いじめ問題」であ
った。今後の指導において道徳科で「いじ
め問題」をどう取り上げ、考えさせ、どう
議論させるか、適切なカリキュラム・マネ
ジメントが重要になる。

新しい道徳科への転換は、校内の共通認
識と個々の教員の学年の発達に応じた効果
的な実践力がカギになる。将来に生かさ
れる道徳性の体得に向けて、何が必要な
課題か、それぞれの学校の積極的な取組に
期待したい。

外部機関との連携と、 チームで取り組む校内研修

鴨川市立安房東中学校教諭 いしざき 石崎 よういちろう 要一郎



1 外部機関との連携

本校では、外部機関との連携を積極的にとるよう心がけている。それにより大きな成果をあげることができている。

(1)本校卒業生Aさんについて

明るく、働き者のAさんは入学以来友人と協調した生活を送っていた。勉強は苦手だったが宿題や自分のできることは誠意を持って取り組み、順調に中学校生活を送っていた。しかし、家庭の経済的困窮が顕著になり、衣食住に事欠くようになった。ライフラインにさえ危機を生じる中で、学習や部活動への意欲を失い、怠学傾向が強まったうえ、情緒不安定な行動・生きることへの不安を訴えるようになった。更に父親のトラブルで完全に収入が絶たれ、その日の食事にも困る状況になり、市福祉担当の方々による、フードバンクをはじめとした家庭への支援が始まった。

(2)定期的なケース会議

3年次5月、スクールソーシャルワーカー（SSW）の派遣申請をし、市教委指導主事とのコーディネートでケース会議を開催することを決定した。福祉課、子ども支援課、障害福祉係、家庭相談員等でチームを編成した。

学校から家庭へのアプローチは難しい。SSWは、市の支援の機関や、活用について熟知している。学校の要望や、生徒本人の困っている内容を理解した上で、家庭へのアプローチをそれぞれの立場で実行可能な方法を話し合う。父親、母親、本人に別々に支援が入る体制は、家族の生活を変え、希望する高校への進学を果たした。現在もアルバイトと学校の両立をし、無遅刻・無欠席で学んでいる。今年度、本校では不登

校生徒の対応に、訪問相談担当教員や家庭相談員との連携で、支援にあたっている。チームでの活動が以前のように回復の兆しとなってあらわれ始めている。

2 チームによる授業改善

昨年度より、市の研究指定を受け、でタブレットPCが40台設置された。市からのICT支援員の配置、教員のチームによる授業研究体制がつけられた。模索の毎日だが、生徒はより積極的に授業に取り組むようになった。

(1)自己決定の場、自己存在感を与える

一人一台のタブレットは、調べ学習や動画の視聴等、自分のペースでじっくり考え、考えをまとめることができ、積極的な意見交換ができる。一人一人の意見は、電子黒板に写し共有することで大切にされ、自己存在感を与えることにつながっている。

(2)共感的な人間関係を育成する

一斉学習、小集団学習、個別学習を必要に応じて最適な形態を選択し、組み合わせで授業展開している。タブレットを使用した授業では、自分の意見を発表しやすく、コミュニケーションがとりやすい。生徒も楽しく生き生きと学習に取り組んでいる。

3 おわりに

今年度、道徳教育推進教師を任された。ICTを取り入れた授業の展開や資料開発にチームで取り組んでいる。お互いの負担感の軽減だけでなく、仲間と共に課題に取り組む、乗り越える心地よさを味わえることが自分自身のエネルギーの源となっている。

千葉歴史の散歩道

袖ヶ浦市文脇遺跡の大量出土銭

～考古資料を読み解く作業～

公益財団法人千葉県教育振興財団・調査課長



はちや たかゆき
蜂屋 孝之

平成22年9月、袖ヶ浦市文脇遺跡の発掘現場から29,900枚余りの銅銭が発見された。これまでに千葉県内から出土した大量出土銭の中でも群を抜いた出土量である。全国で発見される銭の多くは、工事などの際に見つかっている。今回は、埋蔵文化財の発掘調査中に発見され、銭がどのように埋まっているのかを詳細に記録することができた点で極めて貴重な調査例といえる。

いったいどの位の深さで、どれだけの銭が埋まっているのかは、掘らなければ判らない。しかし、相当量の銭が埋まっていることは間違いなかった。調査をどのように行うか慎重に検討した結果、出土銭の周囲を含めて土ごと切り出し、室内において詳細な記録を取りながら丁寧に銭を掘り出していくことにした。専門家に依頼して地面からの切り取り作業が実施され、室内での発掘作業が進められた。

銭は、一緡(ひとさし)と呼ばれる単位で紐に通され、それが幾つも繋がった状態で重なっており、慎重な取り出し作業が10か月の間進められた。その結果、銭は直径約40cm、高さ約25cmの曲げ物に納められ、蓋をして埋められていたらしいことが判明した。取り出された銭は銅のサビで互いに硬く貼り付いており、銭を一枚一枚剥がし、クリーニングする作業と銭の文字を判読し、銭種ごとに分類する作業が4年にわたり続けられた。

以上のような経緯で明らかになった文脇遺跡の出土銭は、銭種が約80種類、中国の北宋から南宋時代(960年～1279年)に铸造さ



文脇遺跡出土の大量出土銭

(千葉県教育委員会)

れた銭がほとんどで、特に北宋銭が圧倒的に多いことがわかった。枚数のトップ3は、初めて铸造された年代順(初铸年)で皇宋通寶(1038年)、熙寧元寶(1068年)、元豊通寶(1078年)であった。最も古い銭は、前漢時代の四銖半両銭(初铸年BC175年)で、最も新しい銭は、元時代の至大通寶(初铸年1310年)であった。

銭1枚は1文、100枚=百文で扱われ、その単位を一緡と言う。通例として一緡は97枚で流通していることが多く、文脇遺跡でも実際に数えてみると97枚を単位とする例が最も多かった。中国から日本に輸入されて紐に通され一緡を単位として流通し、この地に大量の銭が埋められたのは、铸造が最も新しい至大通寶の年代から室町時代前葉のころと推測される。

土まみれの考古遺物は、水洗いから始まり上記のような数々の作業を経て資料となる。発掘されてから資料として遺物を読み解くまでの道のりは長い。この出土銭を含む文脇遺跡の報告書は近くまとめられ、刊行される。

千葉教育 菊 (No.640) 平成28年10月25日発行

編集・発行 千葉県総合教育センター (代表) 安藤久彦
〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13 TEL043-276-1204

URL <http://www.ice.or.jp/nc>

印刷所 株式会社白樺写真工芸

〒263-0002 千葉市稲毛区山王町102-5 TEL043-423-1101